

白鳥と雉子

柏崎

睦 岩手

こきざみに翼を空くうにふるはせて求愛ダンスををどる白鳥
如月の寒さもわすれ見入りたり白鳥二羽の無垢なるダンス
からたちのましろき花のさく道をまがれば春の岩手山見ゆ
家出でて五分もせぬに遇ひし雉子おどろきもせず悠々とさる
雄の雉子がきらびやかなる肉体を誇るがにゆく林のほとり

春の午後

神保外子 埼玉

カーディガン干すベランダでかめむしに今年はじめて遭ふみどりの日
外出を自粛する日々かめむしはコロナ恐れず姿あらはす
コロナ奴めに足止めされて去年今年ハンカチノキの花に会へずも
雑草と野草のちがひ考へてゐるうちねむくなる春の午後
八階にわれは住み着き地上から見えない栃の花を見おろす

燕は来ない

藤崎 絢子 神奈川

海に向く横須賀駅の天井に針植わりをり燕は来ない
弾薬庫へ敷いた引込線古りて野稗、刺草ほしいままなり
老いてやや痛む右ひざ米兵の編み上げ軍靴過ぎしあとゆく
江戸末期コレラ患者を隔離せし島青く見ゆ横須賀港に
ゆつくりでいいと言ひしが変節しワクチン接種いそがしく受く

てのひら

小島 なお* 東京

花びらは指紋のように散らばって春を触っただけなのひら
叩き、東ね、燃やす稲藁 東北の神のひとりがあたらしくなる
視野占める桜の花よみぞおちにいにしえの音楽は鳴り出す
電柱のやがてなくなる空きみを失なうてから空が近い
一滴が一人を選び落ちてくる手紙のようにひらくてのひら

集合写真

柴田 佳美 東京

中学の集合写真は一房のぶどうとなりて春を匂へる
薄紙についた肉まん紅の少女の舌が攫はんとする
肉まんをあつといふ間にたひらげて孤独を恋ひて部屋に子に行く
愛情を疎ましとするわが少女あぢさゐの藍いよいよ深し
銀色の木の葉の *Silica* 翻す新宿駅は巨き樹のこと

コロナ禍つづく

黒石 孝 新潟

けんくわ祭り今年もなくて酒蔵は酒死蔵せりコロナ禍つづく
僅かなる客を頼みに生きる店地中の水を吸ふごとくゐる
剥き出しの二の腕にワクチンを打つ画像今日は朝から百回は見た
音頭取りの蛙なが鳴く後に躡つき田ごとの蛙斉唱をする

7月23日、五輪開催の予約票ピン止めされてカレンダーにあり

原子番号四十七

稲垣草歩*静岡

死ぬことも寝ることもなく繰り返す十億年の波の音聴く
原子番号四十七の元素ほどの価値があるらし結婚二十五年
使われぬままに値打ちを失えるテレカのごとく我は老いゆく
六本の足で大地を進みゆく、よくぞ地球に生まれてきたり
人間を一番殺す生き物は蚊というその蚊を一匹殺す

八つ手

藤岡成子 兵庫

まへの田の麦が育ちてそのまへの家が半分かくれて皐月
射干咲きて筍生えてうぐひす鳴き竹林はいままつりの最中
ひとつ上のジョー・バイデン氏アメリカを引つ張つてゐる吾も頑張らな
ほのあかきソロの至福を楽しまうときには羽目を外すもよろし
古き葉をぼとぼと落としようつくしくなりゆく八つ手、親は捨て石

六つの卵

米田靖子 奈良

「ああしまった！」雉の卵が六つあり巣があると知らず草を刈り来て
あらはとなる六つの雉の卵見る守りの草を刈ってしまった
トラクター降りくる夫に風たちて納屋の中までお日さまにほふ
平成に二百万人捨てし農種籾蒔きて苗代作る
しろじろと定家葛の花が咲く定家の恋のやうに香りて

ダツシユス

鈴木 千登世 山口

野の道をひとり来向かふ人影のマスクしをればマスク取り出す
人影の消えればマスク手に畳み鼻ふつくりと花の風吸ふ
欄干を傘でカンカン連打してマスクの男の子不意にダツシユス
梅の字が悔に見えたる春のゆふ海と見ゆれば和ぎゆくものを
黄の美^はしき春財布買ふコロナ前なら手に取らぬ黄の財布買ふ

ネエサーン

宮 西 史 子 香川

軽トラの荷台よりころげ落ちたりと片われものの長靴が言ふ
部屋ぬちを照らす蛍光灯を見て介護施設の下ゆくわれは
ネエサーンと雉子に呼ばれて振り向きぬ姉といふ身にあこがるる我
啐^{そつたぐ}啄の痕なくぬれてアオサギのうすむらさきの卵殻ありき
断捨離の服よりもなほ惜しむなりそを纏ひたる無瑕のからだを

チリあやめ

中 村 仁 彦 福岡

棒立ちの松葉海^{うんらん}蘭花終へて夏のひかりに戸惑ふごとし
寝ころがる親子四人を映しだすビデオ通話は連休中日
面会を再度閉ざした受付けに預けて来たり赤きカーネーション
フードバンクに集ふ人びと西成も山谷もとほくなりし日本に
南米のチリの高地のチリあやめ日本の雨に打たれて青し